

平成31年4月21日(日)

老球の細道476号

## 2人の恩師の死

会津バスケットボール協会 室井 富仁

私のバスケットボール人生に大きな影響を与えてくれた2人の恩師が最近立て続けに天国に旅立った。一人は大学時代の恩師で直江勇先生、バスケットボール部の監督でもあり、卒業論文の指導教官でもあった。3月末に生まれ故郷の長野でご逝去された。もう一人は、前福島県バスケットボール協会会長の石田洵先生。私が福島県教員チームの選手だった頃に指導していただいた。二人の先生からは最近まで年賀状が来ていただけに、突然の訃報にびっくりした。年をとるということは大切な人がこの世からいなくなっていくこと。寂しいかぎりである。

直江先生とは福島大学に入学して出会った。高校の恩師菊地先生とは違ってダンディーな印象で、最初は近づきにくかった。しかし、大学1年に入学した早々から大事な試合で私を使ってくれた。私も意気に感じて、先生の期待に応えられるようがんばり自信が付き、3年連続インカレに出場することができた。生まれて初めての全国大会だった。

私が大学何年の頃だか忘れたが、先生は2年間アメリカのパデュー大学とイリノイ大学へ留学したことがあった。大学に戻って来てから、アメリカ仕込みのシュート技術を私に個人指導してくれた。しかし、肘を内側に入れるフォームがどうしても体になじめず、先生には申し訳なかったがフォームの改善をすることはできなかった。また、アメリカのスポーツ雑誌もたくさん貸してくれた。おかげさまで当時日本ではあまり知られていなかったボールハンドリングの練習方法などをたくさん学ぶことができた。

ダンディーで紳士だった先生はいつも物静かな口調で指導していた。そのような先生に一度だけ強い口調で叱られたことがあった。練習中に私とある先輩がラフプレイになったからである。バスケットボールは喧嘩ではないと強く注意された。なつかしい思い出であるが、すぐにカッとなる私の性格はその後もなかなか治らなかった。

昭和51年成蹊女子高校で長野松本インターハイに出場した時に、長野県出身だったせいもあるだろうが、わざわざ松本まで来て私を激励してくれた時は感激した。

石田先生は福島大学の先輩ということもあり、大学時代から何かと声をかけてもらっていた。教員チームに入ってから監督と選手の関係で国体や東北大会など数多くの大会で指導していただいた。教員チームに入部してからすぐにスタメンで使ってもらい、冷静、沈着で包容力のある指導はモチベーションを上げさせられた。教員チームのみならず先生の指導していた安積高校、福島高校は常に県大会優勝を果たし、福島西高校の渡邊拓也先生や元県審判長の渡邊亮先生など優秀な指導者を育ててきた。県の初代「上級コーチ」。

後に、チーム指導のみならず、その人間的器の大きさに協会のまとめ役になり、教員出身としては初めて福島県バスケットボール協会会長になった。常に大局的な観点から物事見る先生の大会中の会長スピーチはいつも楽しみだった。また、大会で顔を合わせて挨拶をすると、挨拶の他に必ず一言二言温かく話題を投げかけてくれた。私も「挨拶プラスαコミュニケーション」を先生から学び実践しようと思ってきたがなかなか難しい。

尊敬できる人たちがいつの間にかこの世から去っていく。「人は誰もがいずれ死ぬ。今を生きろ。而今あるのみ」。改めて胸に刻みたい。ご冥福をお祈りいたします。合掌。